

二〇一六年度

普連土学園中学校 入学試験問題

二〇一六年 二月二日実施

国語

二次

- 一、問題に答える時間は五十分です。
- 二、問題は、問題一 ～ 問題五 まであります。
- 三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。
- 四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

ミヒヤエル・エンデという、ドイツの童話作家が書いた短い寓話に『自由の牢獄』という文章がある。それはイスラム教の世界の話で、イッシーアラーという知恵のあるこじぎが、王様のような偉い人に自分の体験談を話している、という設定で話が進む。

イッシーアラーは若い頃、商売人だった。商売に成功して富豪になったが、そのため自分の力でなんでもできると傲慢になっていく。イスラム教の大事な教えも無視して遊びほうけていたが、あるとき彼の前に、美しい女がやってきた。イッシーアラーはその女に一目惚れをして、我がものにしたと思った。ところが女は、誘惑はするのだけれども、「私が欲しいなら、これからの人生、何ものにも従わず、自分の意志だけで動く」と誓ってほしい」と言うのだ。イッシーアラーが「神にかけて誓う」と答えると、「それは神様に従っているからダメだ」と女は言う。そこで「自分の眼差しにかけて」と誓い、いよいよ女を抱こうとした瞬間、彼女は消えてしまう。しかも彼自身、いつの間にか宇宙空間のようなところに飛ばされ、気がついたら大きな部屋の中にいる。女は悪魔の化身だったのだ。部屋にはいくつものドアがあり、そのどれにも鍵はかかっていない。しかし、イッシーアラーはどの扉から出たらいいのか分からない。ドアの向こうが地獄なのか花畑なのか分からず、考えれば考えるほど、どのドアから出ればいいのかまったく分からなくなってしまふ。そして彼はついに、そこから出られなくなる……。

鍵が開いているのに部屋から出ることができない——これは一つの逆説だ。普通、「自由がない」というのは、牢獄のような閉じられた場所に入れられた状態だと私たちは考える。それに対して、部屋のドアが開いていれば、「自由がある」と思う。いつ、部屋から出て行ってもかまわないからだ。ところがこの話は、^①あまりにもたくさん選択肢があることが、逆に牢獄だと感じられるということを示している。自由がありすぎて自由がない。そういう逆説だ。

この話はイスラム世界の物語としてつくられてはいるが、^②私たちが今置かれている状況の比喩として考えることができるだろう。

皆さんは、いろいろな事情はあれ、「好きな人生を選んでいいよ、何をやってもいいですよ」と言われているのではない

だろうか。しかし、「自由があるから毎日が楽しくてしょうがない」と感じるかという点、そうでもない。不自由なこともなく、たいていのことならやつても許される社会にいる。なのに、なんとなく息が詰まるというか、解放された気分にならない。そんな気持ちになったことはないだろうか。

これは、あまりにもドアがありすぎて外に出られない、イッシーアラーと同じ状況にあると言えるだろう。自由はたくさんあるのに、そのせいで逆に自由のない気分になる。どうしてだろう。これが、一つの主題だ。

私たちは普段、当たり前のように「自由」という言葉を使っているが、いざその意味を考えてみると難しい。「自由」とは何かを考えてみよう。

どのような出来事にも原因がある。人間の行動も同じだ。例えば、皆さんが考えたり、その結果として行動するとき、脳の細胞間では電気が走っている。脳の中には電気の回路がつけられていて、私の話を聞いて理解しようとするとき、どこかの部分が活発に働いているはずだ。物理学で習う電気の反応と同じようなことが、脳でも起こっている。皆さんが通常、自由に振る舞っているように見えることも、実はすべてに原因があるのだ。

では、この「原因」と「自由」は、どのような関係にあるのだろうか。何か原因があることによつて、初めから結果が決まっているならば、それは「自由」とは言えない。「自由」とは、あくまで自分で決めるからこそ言えることで、あらかじめ原因があつて起こることではないからだ。

現代の社会状況では、私たちにはいくらでも選択肢がある。つまり自由はいくらでもある。けれども私たちは、「自由がない」と感じている。実際、自然科学を基礎に考えれば、すべての事象には原因があるのだから、自由というものがはたらく余地などないはずだ。しかし、他方で私たちは生きていくうえで、「自由」という言葉や、概念がないと生きていくことができない。なぜだろうか。

例えば、人が失敗したときに「お前のせいだよ」という言い方をする。そのように人を責めることができるのは、失敗した人が自分の意図でやったという前提があるからだ。あるいは「あなたのおかげです」と褒めたり、感謝したりするのも、その人の自由な意志で決めた結果だと考えるからだ。

だから自由のもとに物事が決まらなかった場合は、「あの人のおかげ」とか「あの人のせい」とは思わない。たまたま運

悪く落石が頭にあたってケガをしたとき、石に「お前のせいだ」とは言わないだろう。石は自由な意志で動いたわけではないからだ。

このように、自由というものを「理論」と「現実」の関係で考えると、^③理論上は自由がはたらく余地はまったくないのに、生きていくうえでは現実として自由というものの存在を感じずにはいられない。そう考えたときに、「自由とはなんだろうか」という問いが出てくる。これが今回の話の大きなテーマだ。

先ほど例に出した「お前のせいだよ」「あなたのおかげだよ」というのは、その相手が「自由な主体」であることを前提にしている。「あなたのせいだ」との言葉は、「あなたの自由な選択によって、こういうことが起きた」という意味を持つ。つまり^④「自由な主体」とは、「責任を担う主体」と同じことなのだ。

一般に、人間は生まれてから、「自由な主体」として成長し、なんらかの責任を担っていく。分かりやすく言えば、「責任を担う主体になる」とは、「大人になる」ことだ。子どもは、他人に依存して生きていて、行為のすべてに責任があるとは言えない。しかし「大人」になれば——ここでいう「大人」は二〇歳さいになるという意味ではない——例えばテストで悪い点をとるなど失敗をすれば、「勉強不足なあなたのせいだよ」などと言われる。そういう意味では、皆さんだつて十分に「自由な主体」になり始めていると言えるだろう。人間は成長するにしたがつて、自由の範囲はんが大きくなっていくのだ。

……中略……

人間が「自由な主体」になるとはどういうことか。人間は放っておけば「自由な主体」になるわけではない。ではどうすれば、^⑤責任を持った「自由な主体」になることができるか。

……中略……

ここで少し「存在」について補っておこう。「存在」とはどういうことか。「自分はこれから存在しよう」と思って生まれてきた人はいない。誰もが誰かに生んでもらっている。つまり「存在」は誰にとつても、ただ「与えられたもの」なのだ。存在することを、自分の自由意志で選ぶことはあり得ない。

それからもう一つ、「存在」を考えるうえでポイントとなるのは、人はいろいろな行為をする、ということだ。その結果、「あなたのおかげですよ、あなたのせいですよ」など、人から褒められたり、罰せられたりする。このように私たちが、さ

まざまな自由を行使するための原点は、「存在していること」である。この「存在」とは、本人にとってはまず与えられたものである一方で、その後のあらゆる行為の究極の原因になっているわけだ。

……中略……

人間が生きている間に行うこと、その結果いろいろな性質を持つことは、ほとんど必然ではない。しかし、皆さんにとって選べない、ほかにどうしようもないことが一つある。それこそが、この世界に「存在する」という事実だ。「いない」ということはあり得ない。皆さんにとって、自分が存在するということは事実であり、必然なのだ。

そして、「存在」は「その存在を一〇〇％承認されると自由な主体に変化する」性質を持っている。その理由には、こんなからくりが働いている(⑥図)。まず、他人から認めてもらうということ。この存在の承認には、「他人」の存在がどうしても必要だ。このとき重要なのが、^⑦自分にとって自分の存在は選ぼうがない与えられたものだが、他人はその人の存在を認めるか認めないかは、選ぶことができるということだ。馬鹿にしたり無視したりもできるが、あえて認めている。これがポイントだ。

なぜ人は、他人に認められたら「自由な主体」になるのか。それは他人が認めてくれたという、「私を認めてくれた他人の気持ち・眼差し」を内面化するからだ。そうすると、ただ与えられた自分という存在を、あたかも自分が自分で選んでいるかのような錯覚さくごうが生まれる。自分が自分の運命を選んだような気分、これが「人生を引き受ける」ということだ。こうして、ただ生まれたにすぎない自分が、「この人生を、責任を持った大人として生きよう」と思うとき、自分の存在を自分で決めた「自由な主体」に変身するのである。

……中略……

「神のようなもの」とは、自分が尊敬し、信頼しんらいし、愛着を持つている人のことだ。全面的に信頼するような、自分よりも格の高い他者から、すべて認められているという感覚。この「神のようなもの」を担うのが、普通は親だ。もちろん親でなくてもいいし、親だけではない。だが、成長の最初の段階では、母親の占める割合が大きいだろう。母親、父親を一〇〇％信頼し、それに身を委ねるところからスタートする。やがて、父母以外の存在も、神のように感じるようになる。それは「世間」や「歴史」、または「人類そのもの」といった、観念的なものに変わっていく。

一般に、「自由」と言うとき、他人がいなければ一番自由だと思うだろう。他人がいると、相手のことを考えなければな

らないから、勝手なことができない。あるいは他人が邪魔するかもしれないから、「自由は妨げられる」と考えられている。でも、今日の話は、そういう常識が間違っていることを示している。人間が「自由な主体」になるためには、自分の存在を認める他人の眼差しが絶対に必要だからだ。「他人がいると自由がない」ではなく、「他人がいなければ人間は自由ではない」のだ。⑧「自由」は、もともと他人を含み込んでいる。そして、その他人とは神のようなはたらきをする他人のことだ。

ロシアの有名な作家であるドストエフスキの『カラマゾフの兄弟』という本の中に、「もし、神様がいなかったら、人間はすべてのことが許される」という言葉がある。神様がいなければ、何も禁止をする人がいないから、まったく自由じゃないか、と言っているのだ。だが、これは間違っている。神がいると不自由ではない。神がいなければ人間は不自由になる。この場合の神というのは本物の神様でなくてもいいが、人間は「神のようなもの」がなければ、自由にはなれない。

「自由」とは「責任」を担うことだ。英語で責任はレスポンスビリティ (responsibility) と言う。レスポンスビリティとはレスポンス (応答する、応える) ができるということ、つまり「責任」とは、応答できることをいう。では誰に応えるのか。「神のような存在」が私に呼びかけ、その呼びかけに応じる。それが、責任を持つということの意味なのだ。

では、最初の問いに戻ろう。⑨我々の社会にはあふれるほど選択肢があるのに、なぜ不自由に感じるのか。それは例えばこんな感覚だと思ふ。目の前には選択肢がいくらでもある。インターネットで情報が得られ、「好きな人生を歩んでもいいよ」と言われ、山ほどの選択肢がある。欲しいもの、買いたいものもたくさんある。そして、「この中からどれか選びなさい」と言われる。だけど、好きなものが何かわからないし、どれを選べいいいのかもわからない。これはどうしてなのかというと、現代社会の中で「神のようなもの」がなんらかの理由で弱体化してしまっているからだと考えられる。そのため自由になれない。

(大澤 真幸「自由の条件」『生き抜く力を身につける (中学生からの大学講義5)』ちくまプリマー新書)

問一 ——線部①「あまりにもたくさん選択肢があることが、逆に牢獄だと感じられる」とありますが、これは「イッシーア

ラー」の体験談においては具体的にどのようなことでですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 悪魔の化身とは知らずに自分から美しい女に近づいてしまったことで、かえって悪魔の化身に自由を奪われ身動きが取れない状態に陥ってしまうということ。

イ 鍵のかかかっていないドアがたくさんあることで、かえって自由にそれらのドアから外に出ていくことへの罪悪感にとらわれてしまうということ。

ウ 自分の力で思い通りに自由に何でもできるようになったことで、かえって気に入った女性を自分のものにできないつらさに苦しめられるということ。

エ 「自分の眼差し」を手に入れドアの外に何があるかを自由に見られるようになったことで、かえってどのドアから出るか迷ってしまい動けなくなるということ。

オ 自由に出ることのできるドアがたくさんあることで、かえって自分がどのドアから出たらよいのかが分からなくなってしまうということ。

問二 ——線部②「私たちが今置かれている状況」とありますが、具体的にどのような状況のことですか。本文中から「く状況」につながるような三十字以内の部分抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問三 ——線部③「理論上は自由がはたらく余地はまったくない」とありますが、それはどのような考え方に基づくものですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 考えるということは電気の反応と同じことだという考え方。

イ 「自由」というものがすべての基本であるという考え方。

ウ 「自由」は言葉として存在するだけだという考え方。

エ すべての出来事は何らかの原因の結果であるという考え方。

オ 結果は初めから運命的に決まっているのだという考え方。

問四 ——線部④「『自由な主体』とは、『責任を担う主体』と同じことなのだ」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 何かを自由に選択するということは、その結果に本人が責任を負わなければならないのだということ。

イ 大人になり自由の範囲が大きくなるということは、そのぶん自分の責任の範囲を小さくしていけるのだということ。

ウ 自由に選択するには大人になる必要があるが、大人になれば責任もとらなければいけないのだということ。

エ 他人に依存して生きるということは、依存された人にすべての責任を委ねなければならないのだということ。

オ 理論上はものごとを自由に選択するというのはあり得ないことだが、責任を負えば自由にしてもいいのだということ。

問五 ——線部⑤「責任を持った『自由な主体』になることができるか」とありますが、人間が「責任を持った『自由な主体』になる」ためには、初めにどういうことが必要ですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア その存在を他人から認めてもらうこと。

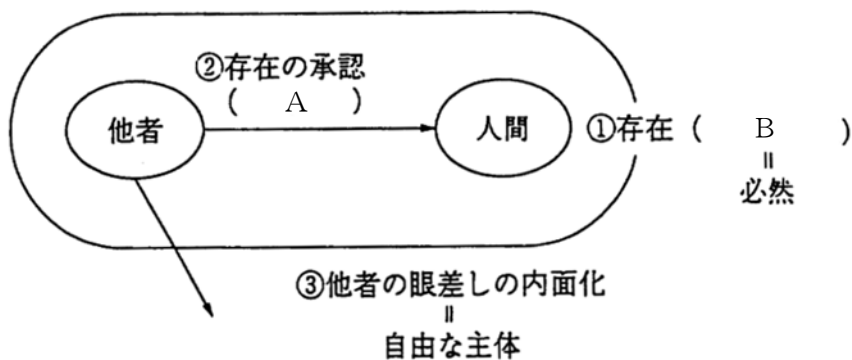
イ 常識にとらわれずに行動できるようにすること。

ウ 責任を持った大人として生きようと決意すること。

エ 選択肢がたくさんあることに気づくこと。

オ 年齢や経験を重ねて大人になること。

問六 —— 線部⑥「図」とありますが、これは「存在」と「自由な主体」の関係性を表した左の図のことで、空欄（A）・（B）には対比的な言葉が入ります。空欄（B）に入れるのに最も適当な言葉を次のア～カから選び、記号で答えな
 せよ。



- ア 自由
- イ 不自由
- ウ 責任あり
- エ 責任なし
- オ 選択可能
- カ 選択不可能

問七 —— 線部⑦「自分にとって自分の存在は選びようがない与えられたもの」とありますが、ここではどういことですか。次の文の空欄に合うように、本文中から十五字の部分抜き出して答えなさい。

人間は といこと。

問八 —— 線部⑧「『自由』は、もともと他人を含み込んでいる」とはどういことですか。最も適当なものを次のア、ウから選び、記号で答えなさい。

ア 自分と関係性がなくても、自分の周りに他人が存在しさえすれば人間は自由になるのだから、もともと「自由」というものの前提に他人の存在が含まれているといこと。

イ 自分の存在は自分が自由に決めたものではなく他人に与えられたものであるため、そもそも「自由」を語る上で自分の存在が与えられたものであることを理解しなければならいといこと。

ウ 選択肢を自分で選ぶことは「自由」だが、その選択肢は自分で作り出すものではなく他人から与えられたものであるため、他人がいと選択肢そのものがなくなってしまうといこと。

エ 人間が「自由な主体」になるためには、自分の存在を認める他人の眼差しが必要であるため、「自由」というものには他人の存在が不可欠であるといこと。

オ 人間が「自由な主体」になるには、他人からの眼差しから自由になる必要があるため、他人がいと「自由」というもの自体が存在しなくなってしまうといこと。

問九 —— 線部⑨「我々の社会にはあふれるほど選択肢があるのに、なぜ不自由に感じるのか」とありますが、これについて筆者は「なぜ不自由に感じる」と考えているのですか。最も適当なものを次のア、ウから選び、記号で答えなさい。

ア 敬うべき対象が本来神と同様の立場とも言うべき自分の両親から、観念的なものへと変化してしまっているから。

イ かつては無数の選択肢があっても運命的に一つのものに導かれていたのに、それができなくなってしまうから。

ウ 自分の存在をすべて認めてくれ、全面的に信頼できる他者の存在が、自分にとって弱くなってしまうから。
エ 高い所からすべてを見守っていた存在が自分と同等の立場になり、身を委ねることに不安が生じてしまっているから。
オ 人々が神への信仰に価値を見出せなくなり、誰もが自分の自由ばかりを主張するようになってしまっているから。

問題二

次の文章を読み、後の問に答えなさい。

少し、思い出した。「前」のこと。僕は本が好きで、「前」はよく本屋に行つたのだ。父さんが家で本を読むのを見たことがないから、僕はきつと母さんに似たんだろう。そう思つたら、もう駄目だった。せつかく入つた本屋で、本の背表紙がちかちかしてうまく読み取ることができない。雑誌のコーナーをまわり、新刊の台を通り過ぎ、「当店のおすすめ」となっている棚から一冊、二冊、手に取つて、また戻す。①読みたい本がない。何を讀んでいいのかわからない。

母さんのせいだというのはわかつていた。母さんが亡くなって、世界は色を失つた。匂いが消え、音が遠くに聞こえ、何が手に触れる感覚も鈍つた。読みたい本など見つからなくて当然だった。

だけど、僕は思いのほか困つていた。シーソーに乗つていて、相手が下へ、僕が空中へ上つたときに、急に相手が下りてしまつたみたいなの、このままだと急降下して尾てい骨をシーソー越しにずがんと地面に打ちつけることになるかわかつていて、それでも手も足も出せない。ほんとうは、両足をシーソーより先に下ろして踏ん張れば、体重を支えることができる。痛い目に遭わずに済む。そうわかかつていて、手も足も出せずにいるのだ。僕の意思にかかわらず、僕の身体は動くことを拒否する。うまくやらなければ、無駄な痛みは避けなければ、と思つているのに、身体が言うことを聞いてくれない。

店の奥は、児童書のコーナーだった。菜月に何か買つて帰つてあげよう。「前」には、彼女はよく児童書のコーナーで目を輝かせてあれこれ手を伸ばしていた。今はきつとそんな力もない。僕は知っている。彼女が毎晩蒲団の中で泣いて、声を殺して泣いて、やがて泣き疲れて眠るのを。菜月のくぐもつた嗚咽が聞こえてくると、僕はやりきれない気持ちになる。かわいそうだと思うし、自分のことがかわいそうにも思えるし、何より母さんのことがかわいそうにも思えてきて、もう何をかわいそうがうていいのかさえわからなくなつた。

ふと顔を上げると、棚の向こうから、女の子がこちらを覗いていた。

②目が合つて、あわてて逸らした。なつかしいような顔だった。心臓がa音を立てていた。同じ学校の子だろうか、と思つたけれど、すぐに違つたと気づいた。制服が違う。でも、同じ歳くらいだと思ふ。もう一度、そつと顔を上げると、彼女もこちらを見た。またすぐに視線を落とす。目が合うのははずかしくて、彼女を見ることが知られるだけでもはずか

しくて、それなのに気になってまた見てしまう。

この感情が何なのか、僕にはわからなかった。彼女の姿を見たくて、本を選んでいるふりをしながら何度も様子をうかがった。彼女は手に持っていた本を棚に戻すと、最後に一度こちらを振り返つてから、その場を離れた。

彼女が見ていた棚のところに行ってみる。どの本を見ていたのか探してみる。これかな、と手に取って、戻して、もう一度手に取って、それから考え直す。もしかしてあの子がここに戻ってきたら。僕が持っているところを見られるのはとてもなくはずかしい。

やっぱ戻そう。そう思った瞬間、彼女がそこに立っていた。

「それ、おもしろいよ」

何も言えずに突っ立っている間に、彼女はにっこり笑って、今度こそほんとうに店を出ていってしまった。

僕はその本を買った。

それが火曜日だった。金曜に、また本屋へ行った。期待せずに店に入ると、こないだと同じ場所に彼女が立っていた。

「こないだは、ありがとう」

僕は勇気を振り絞ってお礼を言った。

「本を読んだのは、すごく久しぶりだった」

口によると、それがどんなに大きなことがわかった。本が好きだったのに、そんなことすら忘れていた。

「もしも、あの本が気に入ったのなら」

彼女は棚のほうを向き、ちよつと時間をかけて何冊か選んだ。それを僕に手渡すと、しっかりと目を見てほほえんだ。笑顔の意味はわからない。でも、心臓が早鐘を打っていた。彼女が店を出ていくと、僕はお小遣いはたいて、四冊全部を買った。

次に会ったのは、翌週の月曜だった。

「もう全部読んだの？」

彼女はうれしそうに笑った。うーん、じゃあ、今度はどうしようかなあ、などと言いながら棚の間をまわってゆく。僕も一緒に歩いた。どんな本が好きか **b** と話しながら店内を一周すると、彼女の腕には何冊かの本が抱えられていた。文庫

が三冊にハードカバーが一冊。ハードカバーか。お年玉からお金を持つてきたから、買えないわけじゃない。だけど、ちょっと困った。

「これ、女ものじゃない？」

「女ものつて」

彼女は首を振って笑った。ふと、どこかでこんな笑い方をするひとを見たことがある、という思いが頭をかすめた。

「洋服じゃないんだから、本に男ものも女ものもないと思うよ。でも、もしも気に入らなかつたら、妹さんにでもあげて」
そうか、妹にか、と思うのとはほぼ同時に疑問が浮かんだ。妹がいることを話したつけ。話していかない、と瞬時に思う。妹のことを話す暇はなかつた。妹に限らず、家族のことは話していながかつた。だって家族の話をしたら、母さんのことを話さなければならなくなってしまう。

でも、目の前にいる彼女が弾んだ声で話すので、僕の心は浮き立った。浮かんだ疑問はゆらゆらつとどこかへ消えてしまった。

どうして彼女からはこんなになつかしい匂いがするんだろう。彼女の横顔をこっそりと盗み見ながら考えた。なつかしさがどんな成分でできているのか知らないけれど、うれしいとか、よろこばしい、たのしい、肯定的な気持ちに、せつない、はずかしい、といった身を縮めなくなるような感情も混じっているのだと思う。少なくとも、僕には、彼女になつかしさを感じてしまったことに対する妙な後ろめたさがあった。

③ 名前を聞きたかつた。彼女のことを知りたかつた。でも、聞いていいものかどうか、迷った。通りすがりなのだ。見たことのない制服を着ているから、きつとこの近くの学校ではないのだろう。

「どうもありがとう」

本屋を出たところで、僕はあらためて彼女にお礼を言った。昼間でも薄暗いアーケード街には、歌詞のない歌が流れていた。

君は、と言いきうになつたのを飲み込んだ。なんと呼べばいいのかわからなかつた。

「……買わなくてよかつたの？」

主語を省いて聞くと、彼女は穏やかにうなずいた。

「ええと、名前、なんていうの？」

思い切つて聞くと、ほんの少し間が空いた。

「平凡ほんな名前。つまらないよ。中村なかつむらっていうの」

中村さん。すぐく平凡だというわけでもないけれど、たしかにこの町には中村さんが多いようだった。クラスにも中村がいて、先生の中にも中村はいた。

そのとき、歩道の向こう側を、こちらを c 見ながら歩いてくる学生服姿が見えた。がっしりしていて、髪かみがくろぐろと多い。そうだ、たしか上別府かみべつぷというやつだ。同じクラスにいながら口をきいたこともない。日焼けした顔に太い眉毛まゆ、声が野太くて、豪快ごうかいに笑う。いかにも運動部の人間らしく、いつも友達に囲まれてクラスを中心にいた。

「どうかした？」

彼女が僕の視線を追つて振り返る。

「なんでもないよ」

ぶつきらぼうな言い方になった。女の子といるところを見られるのは決まりが悪い。いろいろとまずい、と直感がささやいていた。中二の秋になって転校してきて、東京の言葉を使い、馴染なじもうともしない、ひよろつとした転校生。僕になど、いま通つていった上別府は興味もないだろう。しかし、放課後、商店街を女の子と歩いているとなれば、好奇心きんきんを刺激しされたとしてもおかしくない。

「急に黙だまっちゃったね」

中村さんが言った。

「そんなことないって」

まだ声に変な力が入っていた。

「誰だれ？」

「え？」

「さっき通つていったの、知ってる子なんですよ。同じクラスのひと？」

どうしてそんなことを聞くんだろう。誰だつていいのに。少し、面倒めんどうだった。黙つてうなずいた。

「じゃあ、どうもありがとう」

僕は話を打ち切るようにして、手を振って別れた。

……中略……

「わあ、おにいちゃんありがとう！」

帰宅して、買ってきたばかりの本を手渡すと、菜月は小さな歓声を上げた。小さな声だったけど、母さんが死んでからは小さな小さな声しか出なくなっていたから、じゅうぶん大きく聞こえた。

「長いお話が読みたかったの」

「うん」

④ その気持ちは、よくわかる。僕も分厚い本を読みたかった。できるだけ長くその本の中に留まっていられるような、没頭して現実世界へ戻ってこなくて済むような本がよかった。

「たぶん、菜月の好きそうな本だと思って」

僕が言うと、

「女の子の本だよ。おにいちゃんが選んだの？」

表紙から目上げた菜月が尋ねてきて、ちよつと口ごもってしまった。そして、心の中で思った。ほらね、やっぱり本にも男ものと女ものがある。

翌日、昼休みに図書室へ行こうと廊下へ出たところで、上別府に呼び止められた。

「園田、昨日本屋の前に行ったろ」

⑤ やっぱり。面倒くさいことになった。

放っておいてくれ。そう言いたかったけれど、言わなかった。

「いたよ」

いたのは事実だ。本屋の前で、中村さんと話していた。それをひやかしたり、からかったりされるのはいやだ。だけど、堂々としていようと思った。堂々としていなければ、彼女に悪いような気がした。

「店から出てきたところを見てた」

「そうか」

それは僕も知っていた。僕たちのほうをちらちら見ていたじゃないか。

「何を買ったんだ」

「なんでもいいだろ」

愛想のない口調だったと自分でも思う。上別府は鼻の頭に皺しわを寄せた。

「そりゃ、なんでもいいけど。おもしろい本があつたら、普通ふに教しべてくれたっていいんじゃないね」

そう言うのと、教室へ入って行ってしまった。

彼女のことは言われなかった。てっきり何か言われるだろうと思っていたから、拍子ひょう抜けした気分だった。

廊下を戻り、教室へ入った。真田まんだや中村たちと話している上別府に、後ろから声をかけた。

「重松しげまつ清きよ」

「え」

上別府はふしぎそうに僕を見た。

「おもしろい本」

僕が言うと、ああ、と表情を崩くずした。

「わかった。読んでみる」

そう言うてうなずいた。

放課後、にぎやかな生徒げん玄関くつで靴はを履かき替かえていたところに、白い体操服の上別府たちが来た。これから部活でランニングでもするのだろう。下駄箱たに伸のばしかけていた手を引いて先を譲ゆずると、小さく、サンキュ、と言って笑った。

たったそれだけのことだ。だけど、びっくりした。サンキュと言って笑うだけで、上別府が僕を嘲わらおうとはしていないことがいっぺんにわかった。

僕はゆっくりと歩きながら、走っていく上別府たちの後姿を見た。

……中略……

やっと週末になったのに、土曜日は父さんに釣りに誘われた。

当然菜月も行くものと思ったのに、あっさり断られた。父さんは戸惑ったみたいだ。

「読みたい本があるから」

菜月は言った。ずるいぞ、菜月。僕だって読みたい本はあるし、行きたい本屋がある。睨んでみせたけど、知らん顔されてしまった。

ふたりで出かけた。

「こんなに水の澄んだ川があるんだなあ」

父さんはしみじみと言った。

すっかり秋の気配がしていた。川面は細かく波立って、意外に強い光を反射させていた。無数の魚が跳ねているのかと見紛うほどだった。

「釣らなきゃ」

そうして、まるで親の仇みたくに釣り竿を振っては餌を飛ばしていた。

母さんが死んで、仕事を変えて、家も売って、とりあえず息子と釣り糸を垂らすくらいしかすることがないだろう。父さんは釣りをしながらよく笑った。ぜんぜん楽しそうじゃなかったけれど。

「こつちへ来て、よかつたかな」

不意に父さんが言つて、こつちというのが今釣りをしているこの川辺のことにように思えた。でも、きつと違う。こつち。母さんの生まれ故郷であるこの町のことだ。小さい頃こそ夏休みには毎年遊びに来ていたけれど、高学年になると毎年ではなくなり、来ても数日しか滞在しなかった。それでも、去年のお盆に遊びに来たのは、虫の知らせだったのだろうか。母さんは東京へ戻って間もなく病気がわかった。

「父さんはどう思う？」

見ると、父さんは困ったような顔をして川の向こう岸を眺めていた。

「俺にはよくわからないんだよ。こつちへ来たほうがよかつたのか、がんばって残るべきだったのか」

残るといふ選択肢はなかつたのだ。がんばれなかつた。父さんだけじゃない、僕も、母さんのいないあの部屋ではがんば

れなかったと思う。

「太一と菜月がこっちで少しでも前を向いて暮らせればいいんだが」

「前ってどっち」

笑いながら言うと、父さんもつられて笑った。

「どっちだろうな。そんなこと、考えたこともなかったのにな」

父さん、と僕は言った。

⑥「友達^{だち}ができたんだ」

「お、おお、そうか」

父さんは釣り糸を垂れたまま、顔だけこちらに向けた。

「だからさ、こっちが前でいいんだよ、たぶん」

もう父さんの顔は見られなかった。照れくさくて、僕は川の真ん中辺りをじっと見つめていた。

日曜に、ようやく本屋へ行くことができた。

彼女がいると思つたわけじゃない。むしろ、いなくて当然だと思つた。でも、文庫の棚の前に、あのなつかしい姿がなかったとき、僕はやっぱり落胆^{たん}した。

あ。また「なつかしい」と思つた。この辺のひとの顔はみんななんとなく似ている。そうつぶやいた父さんの言葉を思い出している。

そうか。謎^{なぞ}が解けた気がした。彼女はこの辺のひとの顔をしている。つまり、母さんとどこことなく似ているのだ。だから、惹^ひかれた。恋^{こい}とか愛^{あい}とかじゃなく、本能的に惹かれたのだと思う。

「こんにちは」

背後で声^{こゑ}がして、振り向いた。

彼女^{かのじょ}だった。

僕はその顔を見て、すぐに目を逸^そらした。d していた。たしかに、似ていた。みんな似ている、その範疇^{はんちゆう}を少し超^こえ

ているような気がした。

「……こんにちは」

彼女の目を見ずに軽く頭を下げる。

「ちよつと久しぶりだったね」

ほほえんでいるかのようなやわらかな声が、僕の身体に染み込んでくる。その声までも、似ている、気がした。

「どうかした？」

彼女が言った。僕は黙って首を横に振った。彼女も黙った。目を見合わせないで、ふたりで立っていた。

「読んだよ、重松清」

僕が言うと、彼女はほつとしたように表情を崩した。

「『流星ワゴン』が今のところ一番好きだ」

「ああ、よかった」

「それから、『きみの友だち』。『再会』も」

彼女はちよつと声のトーンを上げた。

「そんなに読んだの？　こんな短い間に？」

僕はうなずいた。お小遣いではすべては買えないから、学校の図書室から借りたものも混じっている。

「かあちゃん」

「……え？」

僕は顔を上げ、真正面から彼女を見た。

「『かあちゃん』っていう本もすごくよかった」

半分、嘘だ。すごくよかつたけれど、半分までしか読んでいない。いろんな「かあちゃん」が出てきて、涙で最後まで読
み通すことができなかった。

「あれから考えたんだけど」

中村さんは『かあちゃん』には触れずに話題を変えた。

「新しいおすすめの本。たぶん、小説は重松清から広げていけると思うから。もし興味があつたら、の新ジャンル」
うん、とうなずくと、彼女は先に立つて歩き出した。背格好も似ている。女の子というのは、中学生くらいで身長が伸び止まってしまうのだろうか。

彼女に連れていかれたのは、意外な棚だった。

⑦「何、これ、どうして。僕に？」

料理の本が並んでいる。初めての料理。和食の基礎。スープの本。本場のパスタをおいしくつくるには。

「案外、お料理の本って読んでると楽しいのよ」

彼女は「e」笑った。それから、真顔になって付け足した。

「いつか必ず役に立つから。ご家族のためにも」

ご家族。やけに大人びた言い方だった。彼女は知っているのだ。僕の「ご家族」から大切なひとりが欠けてしまったこと。今度は僕が「ご家族」のためにがんばるときだということ。

落ち着いた表情で僕を見ている彼女に向き直った。

「ありがとう。読んでみるよ」

そう言うのが精いっぱいだった。

家に、母さんの使っていた料理の本が何冊もあつたはずだ。あれを読んで、何かつくってみよう。母さんほどうまくはつくれないに決まっているけど、「ご家族」のために、何か、おいしいものを。

「ご家族に、母さんは含まれるのかな」

おそろおそろ聞いてみた。彼女は目を伏せた。

「あたりまえじゃない。母さんはもちろん太一の家族でしょう」

顔は穏やかだったけど、語尾が震えた。

「中村さん」

名前はなんていうの。その見かけない制服はどここの学校のものなの。

何も聞けなかった。聞かなくても知っていた。家に帰って、おばあちゃんに古いアルバムを借りればわかることだと思っ

た。

「ありがとう」

はつきりと、しっかりと、伝わるように祈りながら僕は言った。彼女はにこにここと笑った。いつもそうしていたみたいに、小さく首を振って。

「こちらこそ」

涙でかすんだ目を上げると、

⑧

彼女はもういなかった。

(宮下 みやした)

奈都「なつかしいひと」

『大崎梢リクエスト！ おおさきずえ』

本屋さんのアンソロジー』 ほんや

光文社

問一 文中の a e に当てはまる語として、最も適当なものを次のア～キから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア くすくす

イ どくどく

ウ ちらちら

エ どきどき

オ ふつふつ

カ もりもり

キ ぽつぽつ

問二 — 線部①「読みたい本がない。何を読んでいいのかわからない」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 身体が言うことを聞かず、棚から一、二冊手に取るのが精一杯ばいで、それでは読みたいと思う本を見つけないから。

イ 母さんが亡くなってから、匂いが消え、音が遠くに聞こえるようになり、世界の色が失われてしまったかのようなことから。

ウ 雑誌のコーナーから「当店のおすすめ」の棚までを一周しても、本の背表紙が涙でちかちかしてうまく読み取れず、手に取った本がどのようなものかわからなくなってしまったから。

エ 母さんのせいで、世界から色や匂いや音が消え、自分の身体の間も鈍ってしまったので、本の背表紙の字を読み取れなくなってしまうから。

オ 「前」はよく本屋に行っていて、母さんが本をすすめてくれたのだが、その母さんがいないので、読むべき本を探し出すことができなくなってしまったから。

問三 — 線部②「目が合って、あわてて逸らした」とありますが、それはなぜですか。答えなさい。

問四 — 線部③「名前を聞きなかった。彼女のことを知りたかった」とありますが、「僕」はなぜ「彼女」に興味を持ったのですか。答えなさい。

問五 ——線部④「その気持ちは、よくわかる」とありますが、「僕」は妹の気持ちをどのようなものと思ったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」が妹のために特別に選んだ本だけを読み続けてさえいれば、どんなに辛いことも耐えられるので、母を亡くした悲しみを忘れていられる。

イ 「僕」が女の子の本を選べるのだとわかって、母が生きていた時のようにこれからも楽しい本をすすめてもらえるので、悲しみを忘れていられる。

ウ 新しい本を買ってもらえたことで、母が生きていた時に家族みんなと一緒に読んだ本に触れても、母を亡くした悲しみを忘れていられる。

エ 「僕」が女の子の好きな本を選んだことで妹はその本を気に入り、喜んで読むことができ、母を亡くした悲しみを忘れていられる。

オ 分厚い本を読んでいる間は本の世界にとどまっていたから、それだけ長い時間母を亡くした悲しみを忘れていられる。

問六 ——線部⑤「やっぱり。面倒くさいことになった」とありますが、どうしてそのように思ったのですか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 女の子と一緒にいるのを見られ、上別府にひやかされたりするだろうと思っていたら、予想通りになったから。

イ 上別府はクラスの中心人物だから、「僕」とも友達になろうと思っていたら、予想通りになったから。

ウ クラスになじめない「僕」に、上別府が何か攻撃こうげきをしてくるだろうと不安に思っていたら、予想通りになったから。

エ 同じクラスにいながら話したこともない上別府が話しかけてくるだろうと思っていたら、予想通りになったから。

オ いかにも運動部の人間らしい上別府が「僕」を馬鹿かにするだろうと思っていたら、予想通りになったから。

問七 ——線部⑥「友達ができたんだ」とありますが、「僕」が父にこのように言ったのはなぜですか。答えなさい。

問八——線部⑦「何、これ、どうして。僕に？」とありますが、「中村さん」が料理の本を「僕」にすすめたのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」が料理に興味を持つようになり、一人で生きていくために料理を作れるようになってほしいと思ったから。

イ 「僕」が料理に目を向けてくれないと家にある母親の使っていた料理の本の存在に気づいてもらえないと思ったから。

ウ 母親は亡くなってしまったのだから、今後は「僕」に家族を支えてほしいということを伝えたかったから。

エ 料理の本は読んでいるだけでも楽しいので、母親を亡くした「僕」の悲しみがまぎれるにちがいないと考えたから。

オ 小説への興味は重松清の本から広がっていきけるだろうから、小説以外の新しいジャンルにも挑戦してほしかったから。

問九——線部⑧「彼女はもういなかった」とありますが、「彼女」がいなくなったのはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「僕」にきちんとメッセージが伝わり、「僕」が前向きに生きようとしていることがはっきりしたことで、すでにその役割を終えたから。

イ 母親を亡くしてしばらくたつても、「僕」はまだ母親に対して深い愛情を持っており、今でも家族の中で母親のことを一番好きだと分かり満たされたから。

ウ このまま「中村さん」の体を借りて「僕」と一緒にいることはできるが、いつまでもこうしては、「僕」が前を向いて歩けないから。

エ 「僕」が家に帰り、古いアルバムを確かめて、自分が母親であることに気づくと混乱するだろうから、一刻も早く「僕」の前から姿を消さなければならなかったから。

オ これ以上一緒にいて、名前や学校名を教えたり、自分が「僕」の母親であることを告げたりしなければならぬ事態になつてはいけなから。

問題三

次の①～⑩の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

- ① 怪^け我^がの回復に多くの時間をツイやした。
- ② 幼なじみを結婚^{こん}式にマ^マネく。
- ③ バスのウンチン^ンが値上げされた。
- ④ 高い地位には、ギム^ムと責任^{てん}が伴^{ともな}うものだ。
- ⑤ 大きく息をス^スって身体を伸^のばす。
- ⑥ 掃除^{そうじ}当番を友達と代^{しろ}わる。
- ⑦ 杉木^{すぎ}立^たのこもれびの中を散策する。
- ⑧ ここには一日中心^{ちゅうしん}地^ちよい風が吹いている。
- ⑨ 灯籠^{とうろう}の灯^{あかり}を絶^たやさないように気をつける。
- ⑩ 彼^{かれ}は、初恋^{こい}のほろ苦い思^{おも}い出^でを語^{かた}りはじめた。

問題四

次の①～⑤の文の——線部の使い方の説明として、最も適当なものを後のア～キから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① この問題は、子供の**ぼく**でもできるよ。
- ② このボタンをおせば、**扉**が開きます。
- ③ 地位もなければ**金**もない。
- ④ うそをついたり**たり**してはいけない。
- ⑤ 暗くなってきた**だけ**でなく、**雨**さえ降ってきた。

- ア 今にもそうなりそう**だ**という状態をあらわしている。
- イ 同じようなことが加わり、さらに進んだ状態になることをあらわしている。
- ウ 極端な例をあげて、他の場合は言うまでもないことをあらわしている。
- エ ある一つだけを例示して、同様のことがらをそれとなく示している。
- オ 軽い気持ちで、何かを例としてあげている。
- カ ある条件が満たされると、いつでもあとに述べる**こと**がらが起こることをあらわしている。
- キ 同じような**もの**ごとを並べあげている。

問題五

次の①～⑩のことわざの意味について、説明が正しいものには○、間違っているものには×を、それぞれ答えなさい。

- ① 「地獄で仏」：地獄で仏に出会うほどびつくりする。
- ② 「たで食う虫も好き好き」：人の好みにはいろいろある。
- ③ 「悪事千里を走る」：悪事は、他の人にも伝染して、広がっていくものだ。
- ④ 「枯れ木も山の賑わい」：枯れ木であっても無いよりあった方が活気が出てくる。
- ⑤ 「天につばする」：人に害を加えようとすると、かえって自分が害を受けるものだ。
- ⑥ 「焼け石に水」：感情的に、熱くなっている人がいたら、落ち着かせてやらなければならない。
- ⑦ 「鬼のいぬ間に洗濯」：怖い相手がいないうちに、やりたいことをのびのびとする。
- ⑧ 「豚に真珠」：かっこいいひとではなくても、飾り立てればおしゃれになるものだ。
- ⑨ 「立つ鳥あとをにごさず」：立ち去る人は、見苦しくないように、後始末をしていくものだ。
- ⑩ 「朱に交われれば赤くなる」：良くも悪くも、人は友人次第で変わるものだ。

(以下余白)